

---

# ボクスボット！ 剣と銃

藤村文幹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボクスボット！ 剣と銃

### 【Zコード】

Z6323Z

### 【作者名】

藤村文幹

### 【あらすじ】

中学生の保治は最新のオモチャ、ボクスボットのコーナーだ。 プラモモデルにチップを埋め込み、筐体にセットすればそこはロボットの「コックピット」。遠い遠い星で戦いを繰り広げる戦士の心臓部になる。

## プロローグ

砂塵が舞い、的に当たらなかつた弾が荒れた大地に突き刺さる。

惑星「コリオン」では今日も一対一の決闘が繰り広げられる。機械の巨人が走り、舞い、互いの位置をめまぐるしく変えながらお互いを墜とすため銃弾を撃ち合い続ける。

流線を多用したスマートな黒い機体は弾を体捌きと走りのスピードだけで躊躇し、決定打に欠ける弾丸を撃ち続ける。もう片方の重厚で線の多い赤い機体が持ち前の装甲で耐え続け、軽い弾幕で黒い機体の動きを制限し、右肩越しに伸ばした青白い電光を纏う一本の電極を黒い機体に向けスナイパーのように機を待つ。

黒い機体が崖になつた地形の手前で進路を180度変える。その瞬間、速度ゼロの隙が生まれた。

「くう！」

赤い機体の右肩から光が溢れ、極光粒子砲が放たれる。

保治はそのビームを操作により曲げていた関節を急伸展し、逃れる。ビームは刹那前に黒い機体の脚があつた空間を貫き、崖に穴を開ける。黒い機体の装甲が熱で歪み、着弾地点には砂岩が溶けてトンネル状の穴が開いている。同時に脚部関節から警告。予定された伸展タイミングを早め通常よりも速く伸展したため、関節部耐久力が減少したのだ。

貰つてしまつたら一撃、そう保治に思わせるには十分だった。ただでさえ、細かく速い弾幕を避けきれずに当たつてしまつているのに。

『やるね』

保治はその余裕のある声に焦燥感を覚える。敵の防御力は想像以上。こちらの火力は足りない。このまま遠距離から撃ち合つても勝てないだろうと推測する。

現在保治のピッケメルクリオは電磁ヒートナイフとマシンガン、

それと前方散布爆雷が装備されている。マシンガンは決定打にならない。爆雷もナイフも遠くまで届かないが、両方に叩き込め勝機は見える。勝つためにそれしかない。

だからこそ、保治は迷いを残しながらも勝負に出た。

赤い機体の周囲を一定距離を保つて回るように走っていた軌道を変え、一気につっすぐ接近。まずは爆雷だ。腰の位置から前方に大量にばら撒くタイプの爆雷を一発でも多く的にぶつけて、装甲を削ぐのだ。

しかしその先は弾幕の中心。弾の密度も勢いも増し、また相手にとつては大砲が当てやすくなるだけだ。赤い機体は当然のように右肩越しに伸びた一本の電極 大出力ビームカノンを保治の黒い機体に向ける。

しかし保治は発射タイミングを見切つていて。赤い機体がビームを発射する直前に進路をずらし、避ける。そして発射硬直の隙を突いて近距離から爆雷を散布。

『うおッ！？』

赤い機体の表面や地面に着いた爆雷が次々と爆裂していく。保治の機体に赤い機体が出しこける弾丸とは別に大小の赤い装甲破片が掠め、被弾する。

接近までにかなりの被弾を許してしまった。だが、爆雷により相手の機銃と頭部メインカメラは潰せた。あとはナイフを突き立てるだけ。

ブースターを一瞬だけ噴かしてナイフを振りかぶる。保治の機体は前方への大きなベクトルを得て空中を滑るように赤い機体に接近する。ナイフが赤熱する。

が、距離が足りない。保治が着地したのはナイフを突き出しても届かない位置。ブースターの噴かしが足りなかつたのだ。保治の操作によりナイフは空を裂き、なにもない空間に突き出される。

「これでっ！」

保治は即座にミスしたと判断し、一瞬の迷いの後に前に出ること

を選んだ。ナイフを突き出した姿勢のまま地を踏みしめ、蹴り抜け  
る。反作用により保治の機体は前に出ようとすると、保治の操作が  
追いつかず、脚を前に出せずに倒れ込んでしまう。機体と地面の間  
にナイフを持った右腕を挟み込んでしまい、多量の不可が掛かつて  
関節が耐えきれずに曲がり壊れてしまう。ナイフも地面に刺さり、  
柄が機体の胸部装甲に強い衝撃を与えててしまう。

『えつ、ちょつ！ んなあ！？』

対戦相手の驚く声と対戦終了のブザーが同時に鳴った。

\*\*\*\*\*

「ま、負けた？」

画面には大きく「YOU LOSE」と表示されている。ただで  
さえ薄い装甲の機体が至近距離で弾幕を張っている機銃の掃射を受  
けたのだ。そこに腕と胸部、そして操作ミスによる転倒ペナルティ  
の3重ダメージ。その結果機体ヒットポイントはゼロ。

『え、えええ、俺今負けたと思ったのに』

スピーカーから対戦相手の呆れ声。

『おたく、その機体合っていないんじゃない？』

遠く離れた街から回線越しの対戦。かなり前から存在する枯れた  
技術の再利用。それによってボクスボットという遊びは幅を広げて  
いる。

「それは分かつてますけど……新しい機体を買うお金がないんです」

『あ、学生さんか。ならしかたないかな。だけどねえ、もうちょっと  
と装甲増やしてでかいキヤノン砲積んだほうがいいんじゃない？  
射撃は上手いんだし』

かつての敵からの親切かつ適切なアドバイス。

対戦後の談話タイムは5分程度。望むならFFFにも出来るし延

長もできる。電話番号も映像だつて送れるサービスタイムだ。

「でもそれだとピッケメルクリオの特性を殺しちゃうし

保治は自分のボクスボットをカメラに移るように持つた。

高さ30センチくらいのロボット。それがボクスボットだ。ゲームセンターにある機械にスキヤンさせて、対戦ができる。そういうハイテク玩具。カスタム性の高さも人気の秘密である。

『それでも。見たところまだ構成に余裕があるみたいだし。射撃タイプに転向したほうがいいよ』

相手の男はかなり遊んでいるようだ、保治のボクスボット構成を見抜いていた。

『あ、そろそろ時間だね。もっと強くなつてまた対戦しようね、えーと、トレジャー君?』

男が保治のパイロットネームを言つた直後に談話タイムが終わつた。画面が暗くなり、狭いコクピット風筐体のドアが開いた。

保治は親切な男性に多少の罪悪感を抱く。

『返事、しそびれちゃつたな』

親切にされたら「ありがと」。それが当然と思っている保治には、今の対戦相手にお礼を言ひそびれたのが残念でならなかつた。

# 1 独白と学校でのこと

撃賀保治、14才。とてもハイテクなホビーであるボクスボットを初めて半年になる。最初にお年玉で買ったピッケメルクーリオを改造しながら使っているが、彼には自分の限界が見えてきた。

ピッケメルクーリオは簡単に言えば高機動格闘タイプ。しかし彼は速度を出している時の機体操作が苦手なのだ。ほぼ出来ない、と自分で考えている程だ。それに格闘戦、というか接近戦全般が不得手で、相手の攻撃に対してとつとの判断が出来ない。

合わないのだ。壊滅的に。

彼自身が思い続けている。

「僕と、ピッケメルクーリオは合わない」

付属している武器は剣だけで、他の武器はみんな保治の少ない小遣いからなんとか捻出している。その中でも使いやすい武器はやっぱり射撃系ばかりだつた。それも中遠距離から狙い撃つタイプのものばかり。だがピッケメルクーリオはそういうものを撃つためには「構え」をする必要がある。それにパーツの射撃武器に対する適性が低く、狙撃時のブレが大きい。

だから保治は咳くのだ。新しいボクスボットも買えず、今あるボクスボットの能力も引き出せず、自分に合わせた改造に踏み切ることすら出来ない自分の不甲斐なさと弱さを嘆きに込めて、彼は咳くのだ。

「やっぱり、僕とピッケは合わないんだ」

\*\*\*\*\*

悩んでいるだけでは問題は解決しないし、時間は過ぎる。

親切なアドバイスを受けた翌日の朝。保治は学校にいた。何のことはない。学生である以上、学校には通う義務がある。友人もそれ

なりにいるし、勉強もそこそこ出来る保治にとつて学校はめんどくさいけど来なければいけない、といった程度の物だ。

毎日パターン化した問答をすればいいし、時折起こるイベントもなにも考えず楽しめばいい。そして友人は、最初の印象のまま、ほぼテンプレート化した話題を提供してくれる。

しかし今日、この時は違つた。

「保治、ちょっとといいか?」

自分の席についた保治に、クラスメイトである剣介が話しかけてきた。背が高くて運動神経抜群。女の子が好きで派手好きのムードメーカー。そう保治は彼を断じてはいる。彼が女の子にもてたいもてたいと周囲にわめき散らすのを保治はよく目撃していた。その願望が叶つたという話は聞いていないが。

「どうしたの? 珍しいね、剣介から話しかけてくるなんて」

保治と剣介はとくに仲がいいわけでもなく、言わばただのクラスメイト。保治には何故彼が自分に話しかけたのか分からなかつた。

「俺さ、お前が前言つてたやつ始めたんだよ。ボクスボット」

そう言つて剣介は手に持つていたナップサックから大きな箱を出す。プラスチック製で、ボクスボットを保管・運搬するための専用ケースだ。サイズによつて様々な製品が用意されている。

保治には彼がそれを持っている目の前の現実に驚愕した。保治が今まで彼を見てきたなかで、彼の一番の興味は女の子にもてることであり、そのための努力を惜しまない男なのだ。その小遣いは大抵ファッショントや雑誌、話題作りのための音楽や楽器などに費やされる、ハズだった。もつともその努力が実を結んだという話を保治は聞いたことがない。

「君が、ボクスボットを?」

思わず問うてしまつた。

「ああ。これ見りやわかるだろ?」

事も無げに答える剣介。そのボットボックスはかなりの大型で、それは大型ボクスボットか大きい武装か、もしくは多くの武装やパ

一ツを詰め込んでいることを意味する。どれにせよ、かなりの資金をつき込んでいることは用意に想像できた。

中身を見てみたい。彼がどんなボクスボットを選んだのかが知りたい。保治は初めて彼、剣介に興味を持った。頭の軽そうな剣介を、保治は無意識的に見下していたのだ。

保治は驚愕を隠しきれず、多少の躊躇を顔に出す。悟られないよう顔は剣介のボットボックスに向けたまま、聞いた。

「開けても、いいかい？」

保治の要望に剣介は朗らかな笑顔を見せていいよ、と言った。人当たりのいい、明るい笑顔だ。

保治はボットボックスの留め具を外し、開けた。思わず感嘆の声を上げる。周囲の騒がしい音が消えるような衝撃。

プロメテウスハーツ。発売されたばかりの射撃型重装ボクスボット。重厚で安定感のある角張ったフォルムは発表当初からネットで賞賛の声が上がっていた。値段はピックメルクーリオのような初心者用ボクスボットの倍以上、スペックも値段相応。間違いなしの上級者向け高級高性能機 プロメテウスハーツ。

思わずため息が漏れる。本当に始めたばかりらしく、サイズの大きなボットボックスには多くの空きスペースが余っていた。それでも、プロメテウスハーツの異様な存在感は保治に何かを主張していた。

「へへっ。かつこいいだろ、俺のボクスボット」

「う、うん……」

剣介の軽い自慢に保治はおざなりな返事をし、保治は名残惜しげにボットボックスの蓋を閉める。これ以上見ていては欲しくなってしまう。アドバイスを欲している彼に、かつこわいどこは見せられないという単純な自尊心から、保治はそうした。

「で、物は相談なんだが」

剣介は保治がボットボックスから手を離すと、それを鞄にしまいながら話を切り出した。

「俺、昨日コイツでプレイしたんだけど。どうも上手く出来ないんだよな。他の人らとか、対戦相手とかは簡単に動かしてたのにさ」

啓介は声のトーンを低くして、少し落ち込んだように続ける。

「店で一番かっこよくて性能がいいらしいのを買ったんだけどなあ。俺下手なのかな？」

保治の目には確かに元気がないように見えた。

保治には剣介が上手く動かせない理由は分かっている。ネットやスペックから容易に結論は下る話だったのだ。

プロメテウスハーツは確かに性能は良い。だがその性能相忯に扱いやすく、特に火器管制の猥雑さとそれから来る機体制御の難しさはユーザーを全力で置いてけぼりにする、上級者向けボクスボット、それがプロメテウスハーツなのだ。性能故に操作が難しいというのは、値段帶の高いボクスボットに共通する性質であり、プロメテウスハーツだけの問題ではない。

しかし今の保治にはそんな剣介を愚かだと断ずることは出来なかつた。保治もピッケメルクリオを殆ど見た目だけで選んだのだ。武器が剣一本という潔さも気に入っていた。何より少年のころ好きだつたあのロボットに似ていたのだ。だから、自分も似たようなものだと保治は考える。

「このプロメテウスハーツみたいに値段が高いやつは上級者向けなんだ。」

保治は表情が変わらないように努めた。彼を笑うことが出来ない保治の、せめてものかっこつけだつた。

「特にプロメテウスハーツは射撃武器を沢山積んでるからね。余計に難しいと思うよ？」

分析、というほどのものでもない。ネットでみたレビューそのままだ。

「そりゃ高いから強いつて思つたんだけどなあ！」

剣介がわざとらしく大仰に天を仰ぐ。しかしこのままほつといて、剣介がボクスボットをやめるのは、寂しい。ボクスボットの値段が

中学生のプレイ人口を狭めているとはいっても、本体さえ買つてしまえばあとは無改造でも何とかなる遊びなのだ。しかし保治の友人に、他にボクスボットをやっている者はいない。

「なあ、ちょっとといい？」

だから、保治は剣介をやめさせないための方策を、思いついた。

「僕のボクスボットで一度遊んでみないか？」

## 1 独自と学校でのIJP（後書き）

書き溜め分を消化したら暫く開くと思います。  
書き溜め分はまだまだあります。

アドラステア21 保治がもつとも通うアミコーズメントセンターである。

「いつ来ても広いのに狭いな、ここ」

剣介が率直な感想を述べる。

旧来の大型筐体やビデオゲーム筐体もあるにはあるが、店の二階部分を占めるのは筐体がさらに大型になってしまふボクスピットだ。10台分のコックピット筐体、アセンブルや改造をするスペースを確保した机が置かれたカスタムベース、そして操縦データや機体データ、システムプログラムなどを編集するためのPCが置いてあるコンピュースによってボクスピットのスペースは構成されている。ベースや筐体それぞれが大きく、広い店内でも狭く感じてしまうのだ。

「そうだね。とりあえずコンピュースに行こうか」

保治は提案した。ボクスピットをやる者は大抵がカスタムベースかコンピュースを訪れる。使う武装を考えてみたり、作戦を練つたりと、理由は様々である。

「ん？ なんでだ？ 早速バトルうとおもつてたのに」

逸る気持ちを抑えられない剣介。しかし保治はそれに待つたをかける。

「僕のシステムステイックじゃ剣介には扱えないだろうし。付属してた初期状態のステイックが残してあるから、『コピーするよ』

火器管制やロックオンサイトのデザイン、そのほかのシステムなど、外見から設定できることとは全てシステムステイックに保存されたデータで行うのだ。電子的なこと以外にも関節やフレームの構造などは有料データや自作データでシステムステイックに入っている。パッケージ付属のステイックにはこのデータの初期状態、出荷時の状態が保存されているのだ。

「わざわざ？ ありがとうな」

底なしの朗らかな笑顔。なんの屈託もなくただ感謝だけを向けてきた。保治はそんな笑顔に、少しだけ恥ずかしくなった。仲間が欲しい、といつも細なことでも打算的に思えたからだ。

「いいよ。高いの一個買って終わっちゃうのはもつたいたいし」

保治はコンプブースまで歩いて行くと、ブースの端に置かれたデータ用端末にメモリステイックを一本差し込んだ。

「予備のステイックだけど、あげるよ。初期状態のは残しておきた  
いし」

弄る前のデータを残しておいて、実際に遊んで駄目なら残しておいたデータに戻し、良いなら上書きする。ボクスボットではよくある調整法である。

軽い鐘のような電子音が鳴る＝「コピー終了」の合図。

「はい。出来たよ」

保治は初期状態のデータが入った真新しいステイックを剣介に渡す。

「ボクスボットはここじゃ他の人の邪魔になるし、カスタムブースに行つてから渡すよ」

ボクスボットのプレーヤーは「こういう場所でのマナーを自然に学んでいく。限られたスペースを気持ちよく譲り合うために、自然と身につくのだ。誰かに教えて貰つてそうする人も多いが。

「あ、そうだ。先行つてくれないか？」

剣介が歩き出した保治の後で言つた。保治は立ち止まり、振り返り尋ねる。

「どうしたの？」

「ちょっとな、やること忘れてた」

保治ははにかむような剣介に怪訝になりながらも、問い合わせるようなことでもないので従うことにする。

保治はカスタムブースにつくと、開いているブースに入り、鞄からボットボックスを取り出す。剣介のボットボックスより小さい。

ピッケメルクーリオは多くの武装を装備すると持ち前の機動性を発揮できなくなる。試行錯誤中の保治が多種多様な武装パーツを入れているとは言え、それほど大きなサイズは必要ではないのだ。

保治はボツトボックスを開く。自作ではない、全て規制パーツで組まれたピッケメルクーリオと、その周りにはこれまた規制品の武器が所狭しと並べられている。その中から保治は初期パッケージに付属していた実体剣を選び、ピッケメルクーリオの手に持たせた。ピッケメルクーリオの初期パッケージにはこれしか武装が付いていないのだ。

そして保治は少し悩んで、少し重いが弾数が多めのマシンガンを持たせる。いくら初期パッケージでは剣一本とは言え、初心者にそれだけ、というのも辛いだろう、という判断だつた。背中の大型スラスターも初期状態にするため外し、初期パッケの小さい、最低限度の出力しかないブースターに変更した。この辺りはあとで選ばせればいい。追加装甲も外し、腰に付けっぱなしだった爆雷散布機も外した。

考えていたカスタム設定にし終わったところで、剣介がブースまで来た。

「おまたせ！」

その手には真新しいメモリステイックが握られているが、保治は気づかなかつた。

「遅かつたね。何をやつていたの？」

「ん、ちょっとな。お、ソレがピッケメルクーリオ？　スマートでかっこいいじゃん」

保治の疑問をはぐらかし、剣介は保治が持つボックスボットを指さす。

「ああ。初期状態にマシンガンを付けておいた。あとは一回やってみてから、かな」

保治はボツトボックスにピッケメルクーリオを収納し、剣介に渡した。

ある程度やつていて、ボクスボットをそのまま握ってセンター内を移動することはしない。細かいパーツが落ちて踏まれたり、また大きめで重いパーツを落として割つてしまつ可能性もあるのだ。だから持ち歩くときは極力ボットボックスに入れることが奨励されている。保治も一度、落としてしまつた経験がある。幸いパーツは壊れなかつたが、買ったばかりで高めのキャノン砲だつたので、落としたときはうひやあと叫んでしまつた。そのキャノン砲はピッケルクーリオのバランスが狂つて機動性が落ちたため、お蔵入りとなつていて、

剣介は保治からボットボックスを受け取ると、持つていたメモリステイックを保治に差し出した。

「じゃあこれ、はい」

保治は反射的に受け取つてしまつてから「なにこれ?」と尋ねた。剣介は受け取つた保治のボットボックスをブースの机に置き、砲から自分のボットボックスを出してブースの机の保治に近い位置に置いた。

「俺がやつてる間、暇だろ? だから俺のプロメテウスハーツ、使つてくれよ」

願つてもない申し出。保治は氣恥ずかしさから断るが、3回問答を繰り返したところで彼は折れた。

## 2 評価試験準備、IJIJはアドラステア21（後書き）

次回、戦闘シーン……ではあります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6323z/>

---

ボクスピット！ 剣と銃

2011年12月21日22時53分発行